

第9回 環境教育講演会 (M-cafe9)

いろんなところでESD

— 学校教育のなかのESD

遠藤 晃
谷村 佳則
酒井 喜八郎

本学宮崎キャンパス大会議堂をメイン会場、都城キャンパス環境教育センターをサテライト会場として、環境教育講演会 M-cafe9 を開催しました。

今回のテーマは「いろんなところでESD - 学校教育のなかのESD」とし、本学人間発達学部子ども教育学科の教員3名が、それぞれの分野（特別支援教育、社会科教育、総合的な学習・理科教育）での自身の取り組みをESDとアクティブラーニングの視点から解釈し紹介しました。

一人目の谷村佳則准教授は、特別支援学校の中学部生活単元学習で実践した、「きれいにしよう！蝶ヶ森-花壇をつくろう-」という授業について。

二人目は酒井喜八郎講師。教員時代に社会科と総合学習の授業で実践した、身近な運河から上流の山林の植樹まで発展していく学習について。

最後に遠藤が、沖縄や宮崎の小学校の総合的な学習の時間に取り組んでいる、自然の中のなぜ？を探究する授業についてお話ししました。

その後、参加者を交えたディスカッションを行い、活発な意見のやり取りが行われました。

両会場の参加者の感想は…

- ・ 上から目線の知識伝達で行ってきた大学の講義の在り方を考える良い機会となった
- ・ 塾の指導でも、知識伝達だけでなく生徒自身の課題を解決する学習を取り入れていきたい
- ・ 大学事務でも、学生と接する際には学生の良いところを伸ばすような指導をしていきたい
- ・ まちづくり協議会でESDやアクティブ・ラーニングの考え方を活かしていきたい
- ・ 限られた授業時間の中での知識伝達とアクティブラーニングの両立について学びたい
- ・ 技術を教えながら、どのように課題解決学習を展開すれば良いのかを考えていきたい

参加者自身が、それぞれの教育実践にある課題（とくに知識・技術の教授と課題解決学習の両立）をESDという視点で再認識・再評価することができたのではないだろうか。

(遠藤 晃)



谷村 佳則

酒井 喜八郎

遠藤 晃

はじめに

遠藤：今日は「いろんなところでESD」というテーマで、学校教育の中のESDという観点で話をしたいと思っています。この「ESD」という言葉、最近いろんなところで聞くようになってきています。その背景と、学校教育の中で、どんな観点で進めていくかという話を今日していければと思います。はじめに、「学校教育の中のESD」ということで、それを読み解く2つのキーワードについてお話をしたいと思います。その後、谷村先生のほうから特別支援教育、次に酒井先生から社会科教育、総合的な学習の時間と絡めた授業の展開、そして私が、総合的な学習を理科教育という観点からその実践事例を紹介した上で、それをもとにいろんな議論をしていければと思っています。

ESD、これは「持続可能な開発のための教育」と訳されています。今、地球上で起こっている課題、例えば生物多様性の問題であるとか環境の問題であるとか国際理解とか、それらを単独の問題としてではなく総合的に考えて解決へ向かうことが必要だということでESDという考え方が出てきています。ですから、いろんな考えをつなげて考えるということが非常に重要なポイントになっています。これまで単独で扱っていた問題を関連付けて考えていく、そういう考え方が必要だ、そのための教育なんだ、というふうな位置付けができるかと思っています。

それで、世界的な動向と国内の動向ということについてですが、このESDが世界的な取り組みになっていく中で、日本の役割は結構大きいわけなんです。もともとリオデジャネイロでの地球サミットでESDに取り組むことが参加国の間で共有された後、その役割が徐々に強調されてきました。注目していただきたいのは、この「ESDの10年」は、日本が世界に向けた「ESDに世界的に取り組もうじゃないか」という提案なのです。

このESDの10年が2005年から始まって2014年に終了します。この間を「ESDの10年」、「持続可能な開発のための教育の10年」と言いますが、もはや小学校の社会科の教科書にも載っている言葉です。ですから、もうかなり市民権を得ている

ということになるし、学校教育の中にもESDというものが内容的には入っているということになります。というのは、やっぱり世界的に取り組むというのを日本政府は言い出しているわけですから、これは省庁を超えた取り組みとして、すなわち環境省だけの話ではなくて、文科省も、国交省も、全ての省庁がこのESDを推進するというようになっていくわけで、そのことが今私たちがESDという言葉に耳にするということにつながっている。

では、このESDの10年が終わった後どうしていくかということですが、今後もっと取り組みを加速させていくということで、現在、グローバルアクションプログラムが始まっています。これは通常GAPと呼ばれていますが、取り組みを1つピックアップすれば、ESDを進めるために教育者、ESDを実践できる人材の育成があります。この人材育成を世界的な取り組みの中でやっていく。大学の教員養成でもESDに取り組む必要があるとか、校長先生の研修会でもESDに取り組むとか、そんなことが提案されているわけです。結果としてこういうものが今、GAPとして、ESDを推進するために動いているプログラムとなります。

もちろんESDの推進はずっと継続しているわけで、ESDを進めるための日本政府の施策として、たとえば文科省はユネスコスクールを日本中に増やし、ESDの10年が始まる前は20校程度だったものが、今1,000校ほどに増えています。何でこんなふうに急激に数が増えたかということ、それは文科省がユネスコスクールをESD推進の拠点と位置づけているからです。

このように、日本の中でも、学校教育の中でも、ESDを進めるということが非常に加速している現状があるわけです。では学校教育の中で、どうしてESDがいま注目されているのかということなのですが、それが今日のテーマにもなります。ESDには、内容的な側面と、その学び方という2つの側面があります。どのような事柄を扱うのかという内容の側面は割と見えやすいのですが、それをどうやって学ぶのかという学び方が見えにくいので、学校教育の中でESDを考える上では、この学び方の部分に焦点を当てていくことになるかと思っています。そこで、ESDの「学び方」に関して、文

科省の中での動きをお話していきます。

今、文科省の中でユネスコスクールを通してESDを推進しているのは国際統括官付という部署です。しかし、3年ほど前から学校教育を管轄する初等中等教育局がESDに注目し始めました。その理由は次の学習指導要領の改定に向けた諮問文の中に表れています。それは新しい時代に必要となる、学力、資質、能力というものを考える上で、幾つかの国際的なプログラムがあるのですが、その1つとしてESDが挙げられています。

ではESDが、学校教育の中で、これから必要となる資質や能力を育むことに、どんなふうに展開されていくことが求められているのかってということになるんですけど。先ほど言いましたこれらのいろんな国際的なプログラムの特徴としては、知識とか技能を習得するだけでなく、それを活用する、そして、みずから課題発見、解決に向けて主体的、共同的に探求する、そしてその成果を表現し、さらに実践に生かすというのが学習のプロセスの中に全て展開されてる、こういったことが挙げられます。

ですから、これから二人の先生にお話しいただく授業実践の中にも、恐らくこういう要素がたくさん入ってると思います。それによって、ESDの取り組みがどんなものかっていう理解に繋がると思います。

今、指導要領の改定の話の中で、文科省のホームページの中で見ることができるのですが、論点整理というものが昨年8月に出ています。先ほどもしも言いましたように、何を学ぶかっていうだけでなく、どのように学ぶかと。さらにそれを通して何ができるようになるかという、こういうトータルなものとして学力というのをもう一度考える。ただ、これは今に始まったわけじゃなくて、昔から言われてることなのですが、それをもうちょっと本気でやってこうというのが恐らくこのアクティブラーニングっていう言葉で表現されているのだと思います。今まででもいわれてきたことが、この言葉に象徴される内容になっていると思います。

これも論点整理の中で文科省が示してる図なの

ですが、何を知ってるか、何ができるかという個別の知識、技能だけじゃなくて、これをどう使うか。さらに、これをもって、一体どんな社会を作っていくかということまで含めた資質・能力ということになる。そのときのキーワードがアクティブラーニングとカリキュラムマネジメントという2つになっている。ですから、今日のキーワードをこのアクティブラーニングとカリキュラムマネジメントとしたのです。

では、アクティブラーニングとは何か？カリキュラムマネジメントとは何か？ということになりますが、学校教育の中でいえば、いわゆる教科横断的、1つの教科の中でとどまらないで、それを総合したものとして、いろんな学びを深めていく、いわゆる総合的な学習の時間とか生活科で今まで言われてきたことですが、それをもっと本格的にやっというのがまずカリキュラムマネジメントの話の焦点になっていると思います。もう1つ、アクティブラーニングっていうのは、本当に子どもが主体的に取り組んでるか、ただそこに参加してるんじゃないかって、ちゃんと参画しているかという視点。ここが重要な点です。そこで、いろんな評価をしていくことになるかと思っています。

ということで今の話を考えていくと、アクティブラーニングとカリキュラムマネジメントを、実際に教室でどんなふうに展開すれば実現できるのか。そのときの先生、もしくは指導者のはたらきかけや役割というのはどうなるか、などがポイントになってくるわけです。

これからお話しいただく谷村先生、酒井先生は、学校現場で実際にこういう学びを実践されてきた先生ですので、それぞれの実践事例の中に、今言ったような要素がおそらく見えてくると思います。このあたりに注目しながら、実践事例を聞いて、そこからまた次の議論に展開していただければと思います。

以上で、私のプレゼンテーションを終わりたいと思います。

では引き続き、谷村先生から、「特別支援教育のなかにESDを見る」というお話をしていただきたいと思います。

.....

谷村佳則：「特別支援教育のなかのESD」

谷村：子ども教育学科の谷村です。特別支援教育を担当しています。本学に来る以前ですけれども、特別支援学校の現場で仕事をしていました。今回は、そのときの経験をもとに話をしていきたいと思います。よろしくお願いします。

まず初めに、障害者とは、つまり障害者の存在について簡単に触れていきます。

この図、皆さんも知っているものとは思いますが、アメリカの心理学者のマズローが欲求の5段階説というのを唱えました。人間の欲求を5つの層のピラミッド型に表したものですけれども、まず底辺にあるのは、基本欲求と呼ばれる生理的な欲求、安全の欲求、これがないと生きてはいけないって言うものです。その上にあるのは、所属と愛の欲求、承認と自尊心の欲求、欠乏欲求と呼ばれますけれども、これは社会で必要とされている役割があるという欲求です。これらの欲求の頂点に来るのが、存在欲求としての自己実現の欲求です。これから、自分は夢に向かって挑戦をする、職場の中でこういったことに貢献していきたいという自己実現の欲求です。

つまり、マズローが言いたいのはこれなんです。人は自己実現に向かって成長する生き物だ。つまり自己実現に喜びを感じる。皆さんもそうだと思います。志望の大学に受かった。念願の職場に入った。今度はその中で、自分っていうものを出して、さらに貢献していきたい。それに喜び感じるはず。そのためには、これなんです。下位の欲求、ピラミッドの層の下にある欲求が充足されていないと、上の欲求は満たされないんです。つまり、下の欲求が充足されていないと、上の欲求は満たされないんです。下の欲求が満たされないって言うことは自己実現の欲求を果たせないって言うことなんです。これを障害者に当てはめてみます。

一般論なんですけれども、障害者というのは養育の中で、教育の中で、どうしても否定されて育ってきていることが多いんです。保護者や教師のほ

うから、「こんなこともできないの」、「何でできないの」、「何々ちゃんはできるのに」。比較されます。最後は、駄目出し。「やっぱり駄目だね」。

それから、褒められた経験が非常に少ない。何かやった、できたとしても「すごいね」、「頑張ったね」、「よくできたね」という言葉をなかなか掛けられない。掛けられる言葉は「やっとなんかできたの」、「今ごろできたの」です。そうすると、所属とかの欲求、承認の欲求がもう満たされていないんですよ。ですから、自尊心が欠如して、自己実現の動機付けが得られません。このことをまず頭に入れておいてください。

そこで、こういった障害児、知的障害児の学習上の特性として、学習指導要領の総則にこのように4点明記しています。2点目と3点目を見てほしいんですけども、成功経験が少ないことで、主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていない。実際的な生活経験が不足しがち。これ、先ほどの説明したマズローの5段階の欲求説と合ってますよね。

具体的にいえばこうです。失敗経験が多い。だから、自信がない。新しい学習をやるよと言ってもなかなか取り組んでくれない。またその取り組みの過程の中でも経験不足、つまりやらせてもらえないんですよ。「あなたは見てなさい。代わりにやってあげるから」。そうすると、経験が不足しているから、学習したとしても消極的、いやいや、やらない。またはその場から逃げてしまう。こういった学習態度が形成されやすいんです。

そこでESDと特別支援教育との関連なんですけれども、まずユネスコが提起しているESDの学び方、教え方はご覧の3点です。簡単にいうと、1つ目は、関心呼び覚まして、理解を深めて、そして問題解決能力の育成を目指した具体的な行動を促すということ。2つ目は、知識の伝達では駄目だよ。体験、体感を重視しながら、探求的な実践をして、参加型のアプローチを取ること。3つ目は、学習者の自発的な活動をうまく引き出してあげること。この3つなんです。これがアクティブラーニングと呼ばれる、どのように学ぶかっていうことなんです。

簡単にこのように書いています。育成すべき資

質、能力を育むための課題の発見、解決に向けた主体的、協働的な学びなんです。もっと短くいえば、能動的な学びです。先ほど遠藤先生のスライドにも出てきたんですが、このESDを推進、拠点する学校としてユネスコスクールっていうのがあるんですね。昨年度の6月現在で、日本に939校あります。その内訳の数を見てください。特別支援学校は7校しかありません。その前の年の4月1日はたったの2校なんです。明らかに少ないというのが分かりますよね。全国に占める、それぞれの学校数の割合からいっても、小学校は大体2.5%ぐらいの割合でユネスコスクールに入っている。ところが、特別支援学校は0.6%です。小学校に比べても、その割合は4分の1。であれば、特別支援学校っていうのはESDを実践していないんじゃないのかと思われるんですが、そうではないんです。特別支援教育というのは、子どもたちが知的発達に未分化の状態なんです。ですから、小学校、中学校、高校のように、学習を教科別、領域別に分けて学習すると、系統的に学ぶことがなかなか難しいんです。そのため、これらを合わせて指導する、各教科を合わせた指導というのが教育課程に位置付けられているんです。これです。

二重構造になっているこの指導の形態のところを見てください。この右側にあるのが、小・中・高の一般的な教育課程ですよ。教科別の指導、領域別の指導。それとは別に、特別支援学校、特別支援教育は、合わせた指導というのがあるんです。その中でもこの生活単元学習ですが、これは子どもたちの生活上の中から課題を見つけ出して、その課題の解決に向けて、体験的な活動を取り入れて、各教科の内容を合わせて学んでいくというものです。

ですから、これを知的障害教育の目標とするとこうなんです。生活に結び付いた実際の具体的な活動を学習活動の中心に置く。その上で、実際的な状況下で、実際に行われる場面の中で指導することを通して、学習に主体的に取り組む力を育むことなんです。

その中でも生活単元学習っていうのは、このようにねらいが定められています。子どもたちが生

活上の目標を達成に向け、課題を解決するために、一連の活動、いろんな学習内容の結び付きがありますよね。それを組織的に経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を実際、総合的に学習するものということです。

ということは、特別支援教育では、ESDが提起する以前からこの学び方、教え方は既に実践されています。ですから、ユネスコスクールに加盟しなくても、われわれはもうやっていますよ、当然のことですということ与实践されてきているんですよ。

そこで、関連性を表した図、これ作ってみましたですけども、見てください。青色の部分の破線を引いたところ、非常に似てるでしょ。同じような文言もありますよね。つまり、ESDの学び方、教え方は、知的障害教育の中の生活単元学習の中でこそ生かされて、延々と行われてきたものだということがいえます。

さあ、そこで、特別支援教育の中のESDの指導実践例ということですが、これについては私が前任校で行った研究の中から紹介していきます。

前任校は岩手大学教育学部附属特別支援学校でした。そこで7年間勤めていたんですが、最初の3年間、研究主任をやってまして、このような研究主題を作ったんです。

実は、附属校の研究主任というのは先行的な、先駆的な研究をしてくださいよ、他校ではやっていない、まねのできない研究をしてくださいよって言われるんですよ。なぜならば、全国発信の学校公開研究会をするからなんです。そこで、この研究テーマはいろいろとひねって考え出したんですが、この言葉、エンパワメントっていう言葉に着目したんです。これは先行研究の文献をあさっていく中で書いてあったんですよ。エンパワメントっていうのは、社会福祉の分野の言葉なんですけども、これからは社会福祉分野だけでなく医療、労働、教育の中でも当然生かされるべきものだ。エンパワメント、直訳すると、力を付ける、力を与えるなんですよ。でも、これは直訳であって、本来の意味は、もともと力のある人たちが、社会的な状況の中で、その力を発揮できない。それを取り除いて、どんどんと引き上げていこうという

意味です。

だから、私は、この研究テーマの中で、エンパワメントをこのように捉えました。個々の力を最大限に発揮していくための環境づくりと支援の展開だよ。奇しくも、私が研究を始める前年にユネスコがエンパワーという言葉を使って提起したんです。これは知りませんでした。最近、ESDを少し学ばせていただく中で見つけたんですけども、ESDが全体として目指していくのは参加型、行動思考型のアプローチを伴って、市民をエンパワーすることだよ。ということは、私が10年以上前に行った研究はリンクしていたんじゃないということなんです。

でも、私は、これ気づかなかったんですが、私がかもともと取り上げたのはこっちなんです。WHOが2001年に、新しい障害者観として障害者の捉え直しをしたんですよ、ICFという有名な分類があるんですけども、それ以前の分類では、障害者というのは社会的な不利、ハンディキャップを背負う。それはなぜかという、あなたに障害があるからですよ。障害者の障害のせいにしてきた捉え方だったんです。

そうではなくて、今度の捉えは、障害者がいろいろな活動に参加していくためには、障害という心身機能、身体構造、健康状態もあるけども、それだけじゃありませんよ。その周りにある環境因子、個人を取り巻く因子、これらを含めて見つめ直さなければいけない。ですから、いろんな相互関係の図で表されてますよね。

端的に言えば、こうです。環境条件の改善をすることが必要だよということです。私がこのエンパワメントに着目して、環境づくりをしてまとめた図がこれです。主体者は子どもたちです。その子どもたちを取り巻く人的な環境、物理的な環境、これを整理しながら、それを包括した社会的な環境も子どもたちが力を発揮できやすい状況にしていきたいと思います。

そこで行った授業がこれです。中学部に所属していたんですが、生活単元学習の中で実践しました。単元名が「きれいにしよう！蝶ヶ森～花壇を作ろう～」です。蝶ヶ森というのは、附属特別支援学校の横にある小高い山です。標高が229メー

トル、歩いてちょっと早足で登って20分から25分で登れるんです。頂上で眺めて、下って学校に戻るまで1時間の中で行ってこれる山なんです。ですから、子どもたちは非常に親しみを持って蝶ヶ森に足を運んでいました。中学部でも、体育の時間にミニ登山ということで行ったり来たりしてたんですね。その中で、子どもたちがよくこんな言葉を言ったんです。「もっときれいだったらいいのになあ」。

さっきの写真を見てください。周りはガラガラでしょ。何もありませんよ。ただ展望台からきれいな眺めが見られるってことで。だから、子どもたちは、やっぱり登る途中、登った頂上が「きれいだったらいいなあ」、そういう思いを持っていたんです。また、その地区は安庭地区っていうんですけども、そこの住民から市役所に要望書を出していたんですよ、「いろんな方が来るんだから、もっと整備してくださいよ」と。でも、市は却下していたんです。

このことを子どもたちに伝えたんです。そして、さらに子どもたちはこう言いました。「みんなで力を合わせて、きれいにしたい」、「整備したい」、「花あったらいいんだよね」。この子どもたちの声を地区の会長さんに伝えたんですよ。そして、会長さんがもう一度、市役所に伝えたところ、市役所が動いたんです。許可が出ました。ということは、これです。社会的な環境がまず整備されたんですよ。学校、子どもたちの家庭、地域の町内会、市役所が一体となって一つの目標に向かったんですよ。つまり蝶ヶ森での活動の実現が、これら4つの課題解決に向けた一体感になったわけです。そうして授業が展開されていきました。

各自が一体感、同じ課題意識を持って授業に進む上で、グループに分かれて、まず活動したんです。それが杭作りグループ、花壇杭を作るということ。花壇作りグループ、できた花壇杭を上を持って行って並べて花壇を作る。そして、周りを整地する。柵を作る柵作りグループもあります。グループばらばらではなくて、同じ一体感を常に意識しながら、授業に取り組みました。

その中で、物理的な環境の整備ですけども、花

壇杭を作る上で、子どもたちが作りやすいように、作業がしやすいような環境の整備をしたんです。1つはこういった教室の中の動線なんですね。動きやすいように。そして、空間の中で、子どもたちが仕事ができるような物理的な構造化を図ったんです。そうすることによって、花壇杭を切って連結させて、防腐剤を塗るという一連の作業ができました。

これが切る作業の中での補助具の例ですけども、補助具というのは教材・教具を子どもたちが使いやすいようにするために、教師が手作りの中で補助的に作る教材・教具なんです。例えばこの子ども、手動のこぎりなら何とか使える。でも、押して引くってというのはなかなかままならない。子どもが何とかこのこぎりを使えるように、ここに木の渡しを作ったんです。その中のこぎりを入れれば外れることがないですよ。だから、前後に引けばいいので、この子は手動のこぎりを十分に使えるようになりましたし、この子は電動のこぎりを使えるだけの能力があったので、安全性を考えて、アクリル板のこういったガイドラインを付けたんです。その中をスライドすれば切れる。

この補助具の使用によって、この子、見てください。もうやる気満々です、もう職人のような感じで仕事に取り組みました。

それから、地域の社会資源を活用しなければいけません。材料などは市役所のほうから提供されたんですね、さっきの杭などは。ところが、やっぱり釘とか防腐剤は買わなければいけません。その費用もいただいたんですが、近くの店を活用して、このように買い物に行きます。その中で、このお店の人から声を掛けられるんですよ、「何作ってるの」、「蝶ヶ森に花壇作ってる」、「へえ、君たちやってるの。すごいね」、「じゃ、いつか見に行くからね」。こういった言葉のやり取りの中で、子どもたちは自信が付くんです。

それから、これ。学校の中で作った花壇杭は、子どもたちが体育の時間に一人ひとり、一つ持って運び上げます。そうすると、蝶ヶ森に行く間に、また声を掛けられるんですよ。「今日はどこまでできたんだい?」、「すごいな、立派に作ったね」。

これってやりがい、生きがいですよ。

そして、人的環境の整備としては、まず市役所の方、非公式に来てくれました。「本当は、私たちが作らなければいけないのに、あなたたちが作ってくれる。よろしくお願いします」。それによって子どもたちはますます自信が付くんですよ、「やるぞ」。市役所の方たちは、公式外にも進捗状況を見ながら来てくれ、子どもたちのやり取りの中で、ますます子どもたちは自信をみながら作ることができるんです。

市役所の方たちだけじゃありません。安庭地区の人々も来てくれて、お手伝いをしてくれました。この一緒にふるいをかけている方、この方は安庭地区の会長さんです。会長さんもみずから山の上に来て、子どもと一緒に作業をしてくれる。もう一体感です。同じ活動をしている仲間なんだ。

最後に全員で花壇苗を植えて、クローバーの種を周りにまいて出来上がりです。このときの子どもたちの表情、非常に生き生きしています。完成式のときには、市役所の方、保護者の方、地区の方、大学の校長、校長というのは大学の教授です。そういった方たちも来てくれました。

そうして、この単元を終わったんですが、実はこの単元、パート2へと続きます。それはなぜかということ、こうなんです。単元が終了したときに、子どもたちの中から、こんな声が出てきたんですね。当然、達成感、満足感の声もあったんですが、それ以外に、「もっと花壇作りたいな」、「もっとあればいいよな」。そして展望台を見て「展望台が汚いな」、こういった声を上げたんです。

これは、自分がやり遂げた成功体験からくる自尊感情の高まりから出た声、そして自己実現に向けた自発的、自分から「今度はこれをやりたい」という声です。これを教師は見逃しちゃいけないんです。ここで教師が「もういいんじゃないか」とか「いや、次は作るの難しいぞ」って言っちゃ駄目なんですよ。「そうか、やりたいのか」、そのたびに声を掛けていかなきゃいけない。つまり、子どもの力を見取って、引き出す次元へと発展させることです。それが持続可能な開発のための教育へとつながります。

次のスライドですけども、簡単にいえば、子

ものが今できていること、今やってること、これをしっかりと教師は把握してあげて、それを手がかりに、これです、共感、提案、支援の中にかかわってあげなさい。そして、子どもの成長過程を評価していきながら、一緒になって主体的、協働的な学びをしなければいけないんです。

だから、さっきの例ですと、「そうか、花壇作りたいのか」、「できる?」、「やる、やる」、「じゃ、幾つ作る?」。そのとき、子どもたち、「4つ」、「6つ」って言ったんですよ。実際はこの単元で2つ作ったんですよ。「今回2つだから、また2つ。さらにまた展望台もやりたいんだよね。じゃ、やっぱり2つかな」って言ったら、子どもたちも「そうだね、2つでいいよ、展望台も作るから」。これ提案ですよ。「じゃ、一緒にやろうか」って、今度、支援の言葉を掛けるんです。

ですから、一般的な指導例でいうとこうなんです、大切なのは。「Aさん、これができるの?すごいね」と褒めて共感するんですよ。次に、「でもね、このようにするともっとできるようになるよ」、提案の言葉掛けなんです。子どもが納得したならば、「そうか、じゃ、一緒にやってみようか」っていう支援なんですよ。この流れが大切なんです。

アクティブ・ラーニングをまとめると、まず、もう古い学習感、学力感は捨ててしまって、21世紀型学力を育成するっていうこと、もう教師中心じゃありません。学習者、子ども中心です。そのためには、受け身の学習は駄目。探求的、協働的な、能動的な学力を身に付けるんです。

これを授業に当てはめるとこうですね、暗記再生型の授業、暗記でいっぱい頭に詰めて、それをノートにまとめるとか、そんな授業ではなくて、子どもたちが考えた、そして、それを相手に伝えながら一緒にやり取りをする、そういった思考発信型の授業で探求、活力、協働型の授業づくりをしなければいけないんです。

ですから、このようにまとめると簡単ですけども、今までのやり方に凝り固まった私たちですと、なかなかできない。ですから、これ。教師や学校が変わらなければ、子どもたちは変えられないんですよ。だから、われわれ教師がみずから

自分を変えていきたいと思います。

おまけにっていうことで、次の年ですけども、次の年は、子どもたちが単元を課題として見出す前に、単元がやってきたんです。それはなぜかという、隣の地区の活動センターの方が、蝶ヶ森に行って、この花壇を見たんですよ。「いい花壇だな。ぜひうちのセンターの庭に作ってもらいたい」。学校のほうに「作ってくれませんか」と依頼が来たんですよ。子どもたちに伝えたら、「作ってやるよ」、「作るよ」。こんな言葉が気持ちとなって出てきました。これは、自分たちは作れるという自信の現れでもあり、自尊心が高まっているということです。

最後に、去年のNHKの朝の連ドラ「マッサン」っていうのを私、好きで見えてたんですけども、「マッサン」が勤めていた現在のサントリーの創業者は、鳥井信治郎というんですけども、この方の口ぐせがこうなんです、関西人なので「おもしろい。やってみなはれ」。何かしら今、面白いアイデア、面白いものをやっていると、すぐに取り上げてくれたんです、「おもしろいなあ、よし、やってみなはれ」。普通ならば、けなしたりもしますよね。「何やってんの」とか「それ変だよ」とか。そうじゃないんです。まずは相手の立場に立って、「いいことやってるね。じゃ、続けてみようか」っていう気持ちなんですよ。これを受けて社員は、たいていこう言ったそうです。マッサン、竹鶴政孝もこう言いました。「見ておくんはなれ」。この中に、先ほど言った共感、提案、自然な流れが出てますよね。

このような環境の中で活動すると、やはり新しい学び、探求、創造が出てくるんですよ。だから、マッサンは、日本の国内ウイスキーの第一号をニッカウヰスキーとして作り上げたんです。こういったところを特別支援教育の授業の中で私はやってきました。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

酒井喜八郎：「社会科教育のなかのESD」

酒井：私は、南九州大学の子ども教育学科の酒井と申します。社会科教育のESDという視点から発表します。今日の発表の骨子ですけど、3つの報告をします。まず、オーストラリアのESDの取り組みを紹介します。次に、自分も小学校に勤めていた時期がありまして、川の総合学習を4年間やったので、その実践を通して、ESDの視点からカリキュラムマネジメントの話をしたと思います。最後に、現在、大学の社会科教育法で取り組んでいる、受け身型の講義ではなくて、学生が主体的に取り組むアクティブラーニングにチャレンジしたので、その実践例を紹介したいと思います。

＊オーストラリアのESD教育

まず、オーストラリアのESDですが、オーストラリアの環境教育は盛んでして、特に私はシティズンシップ教育の関連でどんな取り組みをしているかを見てきました。オーストラリアではESD (Education for Sustainable Development) とは言わず、EFS (Education for Sustainability) というのが一般的ですが、ここでは混乱しないようにESDとしておきます。

これがESD教育の図ですけども割愛します。ただ、結構、ここにもありますように、環境学習とか、生物多様性とか、オーストラリアもそのような実践が行われていました。

あと、もう1つ環境教育でいうと、日本では、オーストラリアの高校の授業の研究がよくあるんですけど、幼稚園、小学校、中学校の事例がほとんど紹介されてませんので、先ほども出てきたキーワードですが、「つながり・コネクション」、「自然とのつながり」とか、「社会とのつながり」、こういう点に着目してどのようにオーストラリアの学校は実践しているかを見てきました。

でかけたのは2014年の8月、メルボルンに行ってきました。これは国土地理協会の研究助成を獲得することができたので行けたのですが、モナシュ大学に知人がいまして、その先生を頼って行ってきました。幸いなことに、これから紹介します幼稚園、小・中学校、大学のESDの実践を見ることができました。



スライド1－オーストラリアのメルボルン

実は、オーストラリアは、今までは、州ごとに教員の裁量で自由に授業をすることが多かったのですが、最近、ナショナルカリキュラムができて、アカラ (ACARA) というんですけどその機関が作成しました。日本の学習指導要領に当たるものですが、地理のところだけ見ても、ESDに関するキーワードが幾つか出てきます。例えば、関係性とか、サステナビリティなどです。地理のカリキュラムも、やっぱりESDや環境にかかわるキーワードが出てきております。後で少し紹介しますが、砂漠の多い国ですので、水の問題もよく取り扱っています。

まず、保育園を紹介します。保育園は、生態学や幼児教育の研究者などが日本からも見学に行っている報告などを見て、このコパークという保育園に注目しました。このコパーク保育園へ行ってみたのですが、ブッシュキンダー (Bush kinder) といって、保育園の近くにある森に季節ごとに定期的に遠足に行きます。毎回、定期的に行くことで、子どもたちは、季節の変化などに気づくのです。例えば、私が一緒に引率を頼まれ見ていたら、先生が木の前で立ち止まって、「この前とどこが変わってる？」って言うと、子どもたちが「つぼみが膨らんできた」とか、「少しあったかくなってきたね」と共感的にそこで学び合いをしているのです。

子どもたちはやっぱり森に定期的に行くので、いろんな問いをもって、各自の問いを大切にして学習を続け、保育園で1年間の取り組みを継続して実践記録集にしています。



スライド2

保護者も森の遠足に引率していきます。こういうクリークを見ながら森へと歩くのです。これ、森に来たとこですが、もう自由に子どもたちが遊んでいて、例えばこの子たちは思い思いに木の枝をどっかから持ってきてテントを作り出したので、この幼稚園の先生は、3本の枝を組み合わせるといいと、支援してるんですよ。



スライド3

ただ、もう子どもを本当に自由に遊ばせて、自由にやって、何かそこで、先生たちが子どもたちを観察していて困っていたら支援するというような。走ってる子もいれば……これ、ガムツリーっていうんですけど、乾燥に強くて、ふつうの植物は葉の表のみで光合成しますが、ガムツリーは両面に日光を受けて表も裏も光合成がすごく盛んな



スライド4

んですが、このガムツリーに木登りする子もいれば…。



スライド5

これは、メルボルンの小学校の教室です。わかりますか？日本地図があるんですけど、あとコンピュータも入ってて、みんな日本に対する関心が深いんです。この先生は、小学校の先生で、1年生の授業を見せてもらったのですが、「廃棄物の分解」の授業をやってみて、これはその先生が作った教材なんです。実際に、先生が予め準備し



スライド6

たバケツの中に入っている紙や木、プラスチックなどいろんな廃棄物がどれぐらいの期間で土に戻るかっていう、一つずつ取り出しながら、色画用紙で作った時間のものさしの上に、みんなで話し合いながら、置いていくことを授業でやっておりました。外にはこういう菜園があって、野菜を育てていました。

これは小学校の日本語教室ですけど、多文化の国なので、タブレットなんかもうどんどん使っていて、オーストラリアはほんとにICT国家だっということが分かります。

それから、中学校ですが、郊外の中学校を見に行ったのですが、3校ぐらい集まってきて、全て

学生たちが主体的に司会とか発表をやるのですが、そこでは基調講演でメルボルンの水道局の人が水道について話をしたり、水がなくなったときの話をしたりして水の大切さを教えるのです。



スライド7

それからこれはセレス環境公園というのですが、メルボルンから20分ぐらいで行けるところなんです。バスで大勢の学生を引率してきて、ここで1日環境学習や多文化学習をします。いろんな教育プログラムがこの環境公園の中にあって、例えば民家を改修した家では、水道とか水について学べるように、水の量を計ったり、あるいは絶滅危惧種について学ぶカードが準備してあったり、オーストラリアの多文化や歴史について学ぶコーナーがあったり、幾つかの学校が交流をしていたり、メルボルンのたくさんの小学生が交流をしているのです。あと、グリーンチームの活動として、毎回、自分たちが小学生、環境に対して取り組んだことを、それぞれの小学校のグリーンチームがニュースレターへ報告するなど、主体的な活動をしているので注目しています。

今、オーストラリアの各校種をざっと見たのですが、あと大学ですと、例えばイギリスの大学とスカイプとかでウェブを使って研究発表とディスカッションをしており、私も参加しました。

このように、メルボルンのモナシュ大学の先生の言葉にあったのですが、自然と、社会とのつながりを学んでいくってところが、これからのESDのキーワードではないかと考えます。

あと、今、オーストラリアのことを紹介したのですが、他にも、多文化教育とか、人権教育とか平和教育などグローバルな視野からの教育がすごく盛んです。冊子を持ってきたのですが、『ブラ

イト・スパークス・リーディングライツ・スナップショット・グローバルエデュケーション・イン・オーストラリア』です。これはモナシュ大学のリビー先生らがオーストラリアのグローバル教育の実践について書いた本です。この中に、オーストラリアの国内のいろんな高等学校のグローバル教育の取り組みがあるのですが、もし後で、協議会の時間があれば詳しく紹介したいと思います。

*小学校での川の社会科総合学習

続きまして、自分が小学校の教員の頃に、2003年から約4年間にわたって取り組んだ環境教育の実践を紹介したいと思います。

堀川の総合学習ってということで、名古屋の都心部を流れているので、自然にきれいな川があるとか、そういう感覚ではなくて、運河ですね、堀川という川、運河、があるんですけど、そこがあまりきれいではなくて、なぜ汚いかっていうと、高度経済成長の時代に、都市化が進んで、やっぱり排水なんかもあって、汚れていった川なんです。最近、地域住民の努力や、木曽川のきれいな水を導水したり、浄化されてきています。この2003年の頃は、皆さまもご存じかと思うんですが、愛・地球博といって、環境博覧会があったときに、市民参加型のEXPOがあったので、それをうまく絡めて子どもたちが主体的に活動する実践ができていないかっていうことで考えて、およそ4年かけて実践したものです。

このスライド、景観写真のほかが、英語になっているのは、この実践はシンガポールの幼稚園の園長会やベトナムの大学でプレゼンを頼まれた時、この実践研究を紹介しているからです。最初は日本語で作っていたのですが、英語に直して、堀川の総合学習の実践を紹介して現地の先生や研究者に好評でした。

実は名古屋城っていうのは、皆さんご存じだと思ってしまうのですが、名古屋港まで、丁度ここが10キロぐらいあるんですけど、ここが堀川という運河が造られたところで、港から材木を運んで、名古屋のお城を造ったり、あるいはもっと後の時代も、いろんな物資を運搬したりしたところで、ほんとは、江戸時代に開削された堀川は、最初はきれい

だったし、物資を運搬する川（運河）として活用されていたのです。

ところが、都会の子どもたちってというのは、先入観でも最初から汚いとか、生き物がいないとか。一方で、木材を運搬する重要な川だったというのは知ってると思いましたが、少しきれいになってきたと、そういうようなイメージもありました。

「皆さん、わかりますか？」これが名古屋城の金のしゃちです。これは何かわかりますか？これみそカツですけど、名古屋ってというのは、名古屋城の金のしゃちほこ、それで、これが堀川です、都心部を流れている。2003年に、屋形船を借りて、小学校4学年の子どもたちを引率して堀川の運河探検をして、いろんな発見がありました。生



スライド8

物はないって言ってたけど、カメもちゃんといましたし、鳥もいました。あと、今回の実践のメインになった筏（いかだ）がありました。この川沿いの丸太が筏です。

その後、2003年に、子どもたちと調査をしましたけど、この年、学習発表会で「堀川の劇」をやっています。また後で見せます。



スライド9

あと、市役所で「堀川の歌」を作って発表したり、さっきの愛知万博に5日間参加したりしました。最後、2006年に、木曽川の上流に行って植樹

をし、ヒノキを植えたのですが、上流と下流の小学校同士で交流学習をしました。上流の小学校は、きれいな、生き物の総合学習の発表して、こちらは都市域の下流からは、こういう筏から、堀川がどのように社会や地域のまちづくりの発展に貢献してきたという地域学習の発表をしてきました。

これが、船から見た景観です。これが筏の景観です。これが当時残っていた丸太の製材所で、こうやって木曽の山奥で伐採された丸太を筏にして愛知県西部まで来てさらに、運河を上ってきて、丸太を製材していたのです。これは水質調査に行った様子、これは筏師さん、名古屋の無形文化財なのですが、海の日に行事があるって、この日、子どもたちや有志を連れてって、この子、4年生なんですけど、筏師に「ものすごく素質がいい」と言われて、すごく上手に、これ玉乗りっていうんです、これは丸太を輪切りにしたものです。



スライド10

あと、この上にこう。それから、この子どもたちがやっぱり2本ですけど、これも難しい伝統技だと思うんですが、やってみました。



スライド11

結局、有志の子どもたちだけでなく学年の子どもたち全員にとということで、そのとき、自分が学年主任をやっていたので、筏師さんたちに小学校に来ていただき、協力してもらって、この丸太、とても重いんですけど、大人が大勢で4時間かかって運んで、こういう一本乗りという技をやっ



スライド 12

でもらったり、あるいは子どもたちが実際に筏乗りにチャレンジしたり、これは2本乗りっていうやつですが、ちょっと残念なのは一本乗りの写真、数年前のやつなんでなくて…でもすごく喜んでやりました。

その後、それで、ただ活動したというだけではなくて、やっぱりどうして、その丸太、筏があったかっていう、「なぜ、筏があったか」ということで調べに行ったんですね。例えば、どこから来てるかということで、たどって行くわけですね。



スライド 13

これ貯木場って言って、木曾川の上流で切った木(丸太)を貯木場にためて、簡単にいうとショールウインドウのようなもので、ここで、木を売買して。これは製材所ですね。



スライド 14

こういうクレーンがあって、丸太を運河から上げるとこなんですけど、こういうのも、もう今、遺物として、これ使ってなくて。このクレーンだけ、運河沿いに残ってるのですが、まだこっちの愛知県西部のほうは、まだ当時残ってたんで、こりゃいいと実践にバスを貸し切って学年全部で材木のルーツを辿って社会見学に出かけました。結局、コンテナで集成材のように輸入されることによって、輸入が多くなって、簡単にいうと、木材の流れ、木曾川の上流で木を伐採して、川に筏で、昔は流して、貯木場に集めて、それが運河を渡ってきて、製材所はここで切るっていうこれまでの経路が見えないんですね。だから、見えないものを、やっぱりこの筏っていう景観を通して、「なぜ筏が流れていくの」っていうところから探究的にやっていくことで、下流と上流のつながりに気づいたってことなんですけど、大きな学びとなりました。

これ集成材を教室に持って行って、みんなで写真…これ、コンテナで集成材や家具を積んできます。

当時の学年で、みんなで堀川の劇をしたんですね。この子、福島正則役なんですけど、結局、堀川っていう運河は、家康が名古屋城を造るときに、福島正則に命じて造らせたっていう、そういう物語です。

あと、堀川の実践は当時万博があったので、こういう学習成果を、万博で5日間チャンスをもたらって市民に発表や啓蒙することができました。堀川の実践を1年、2年積み重ねていくにつれて、筏師さんと呼んだりあるいはNPOの堀川ライオンズクラブの人たちも協力してくれるようになってきたりして、すごい<つながり>ができて、堀川の歌っていうのも作ったんですね。自分、ピアノは1曲だけしか弾けないんです。「旅立ちの日に」っていうのが1曲だけ弾けたので、それに乗せて歌える曲です。これ5日間とおして弾きました。万博会場に5日間出演して、保護者も協力してくれるようになって、地方新聞などにも紹介されました。

最後の年なんですけど、筏の総合学習をしてきたので、まとめとして上流に行こうということで、堀

川ライオンズクラブの協力もあり植樹に行ったんですね。引率は大変でした。名古屋から木曽川上流は結構遠かったので、日帰りの強行軍でしたが、これヒノキを植えてるところです。最後、学

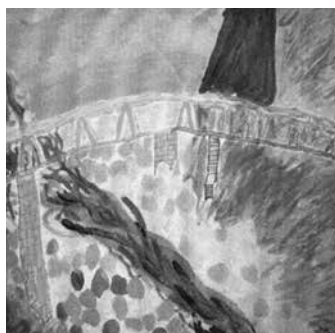


スライド 15

校で、子どもたちが絵を描いたのですが、この時の植樹活動の体験の喜びを表しているような、ひのきの苗木は小さいのですが、こんな緑色でできかき描かれ、木曽川の水も青いきれいなタッチで描かれていました。



スライド 16ー児童絵 1



スライド 17ー児童絵 2

最後、まとめですが、景観からの教育は思った以上に探究的な地域学習に発展し、大変重要だと思います。筏の景観から、「先生、なぜ筏が流れていくの?」という子どもたちの「なぜだろう」から始まったんですが、自分も筏を見たとき、面白そうだなってということで、実践できないかなって少しずつ地道にやっていたのですが、4年間で川の学習が下流と上流のつながりを学ぶESDの学びになりました。自然の視点だけでなく歴史の視点も組み込むと、特に都心部の学校はカリキュラムが深まっていくように思いました。

また、実践にチャレンジするだけでなく、見直しをもって計画を立て、問い続け、毎回の学びを省察するようにして、授業も省察するように心がけることで、より目標が焦点化され、抽象化されて、さらにESD的な学びに深まっていった感じがします。

伝統技術を持った筏師さんや保護者の方々、堀川ライオンズの人たちの出会いがあり、ついには木曽川上流の植樹活動ってということになりました。この頃、市民参加型のEXPOなんかもちょうどそのとき、タイムリーにあったのも、上流と下流をつなぐ総合学習に発展していったと思います。教師の自分も、素早くEXPOに対応し、それに児童と共に主体的に参加していったというものなのですが、教育賞を頂くほどの良い実践になりました。

ということで、オーストラリアはこういう持続可能な環境教育の実践をやって、学校現場の実践としては、こんなESDの視点からの川の総合学習の実践にチャレンジしたという海外と国内のESD教育の話でした。

それでは、3つめのどうしたらアクティブラーニングの実践ができるようになるかっていうことは遠藤先生の発表の後、また時間があれば詳しくお話します。

終わります。ありがとうございました。

遠藤 晃：「総合的学習のなかのESD」

遠藤：続きまして、総合的な学習の時間、特に理科教育という観点から進めてきた実践の話をごさせていただきます。

まず、沖縄の話から。沖縄県那覇市の西に座間味村ってところがあります。その小学校で、2002年から、総合的な学習の時間でかかわりを持っています。そこで課題解決的な学習に取り組んできました。

もともとこの学習を始めた経緯ですが。この島にはケラマジカというシカがいて、実はそれは400年前に薩摩が琉球侵攻して支配したという歴史の流れの中で、鹿児島県にいたシカを琉球に持っていったという経緯があるのです。そういう歴史的背景があるので天然記念物に指定されているシカ、これがケラマジカです。

このシカを管轄する地元の教育委員会は、貴重な生物であるってことで保護した。ところが住んでる人にとっては、シカはもう畑を荒らす害獣に過ぎないんで、極端な話、全部獲って殺せというふうなことを言う人もいます。それで、こういう2つの対立の中で、専門家として意見求められて考えました。私はシカの生態学の専門家です。そこで長年ケラマジカの研究をしていたわけです。で、例えば私がよそから来ている研究者として、この動物は貴重だから守りなさい、というのは、ちょっと違うだろう、と。どうするかは、住んでる人が決めていかなければいけないと考えたわけです。

専門家とか研究者といった「よそ者」がときどき来て「天然記念物のシカを守れ」と言っても、それは畑を毎日荒らされてる人にとっては何の説得力もない。では、それを住民の人たちが考えるために何が 필요한のか。大人を啓蒙する必要性もあるけれど、まず学校で子どもたちにシカのことを知る授業を行うことが必要だと考えたことが最初、ことの始まりです。

だから今、ESDの考え方でいえば、異なる意見がある時に、二者の対立ではなくてどこかで折り合いをつけることが大事で、いわばESDはそれができるようにするために効果的な教育なんだって

いう話になるわけですけど、そういうことを私自身は当時、実は気づかないうちに、今いうところのESDという視点でやっていたということになるかと思います。

これは教育委員会と連携して、2002年にケラマジカ保護という観点から始めたんですけど、実はその後ずっと、そのことが学校の中でとっても大事な学びになってるということ、現場の先生たちと一緒に共有しながら作り上げてきたという、こんな実践の歴史です。

ちっちゃな学校で子どもたちは少ないんです。この授業でまず何をやるかっていうと、シカについて、個人個人の研究テーマを決めていきます。そのために、とにかく森を歩いて、いろんなものを発見する、子どもたちが発見するという、そこに時間をかけるということが一番大切にしています。

そうやって課題が決まってくれば、それについて、どうやってやるかっていうのをまた子どもたちが作戦を立てる。みんなで話し合いながら、協働しながら、実験をやったりして行って、最終的に発表するってことをやっています。

それで、たまたま機会があったんで、沖縄の生物学会で発表しました。子どもたちが研究やってるっていう話題性よりも、実は内容が非常に面白いんで、この発表がこの学会で定着したんですね。毎年、子どもたちの枠が20分ぐらい設けられていて、この間は、もうみんな学会員がこの発表を聞くっていう、多いとき100人ぐらいの専門家の前で子どもたちが発表するってことを繰り返しています。

ある年の事例をちょっと紹介します。子どもたちは森の中で、シカが食べた跡をいっぱい見つけるんで、食べ物に興味を持つんですね。その年は、何を調べたいかということでグループ分けしたら、シカが好きな植物は何かっていうのと、好き嫌いが何で決まるかっていう大きな2つのグループに分かれた。その後、どうやって調べようかってのは子どもたちが考えていきます。

シカが好きな植物はっていうのを調べる子たちは、食べ跡を探して回って調べることにした。島中の植物を見て回る、あとは地域の人にインタ

ビューするとか。好き嫌いが何で決まるか調べるっていう子たちは、実験をした。シカが好きな桑の葉っぱにいろんな味を付けて実験しました。さて、結果です。インタビューしたほうは、シカは何でも食べる、しかし、マリーゴールドは食べられないっていう結果が出てきます。実験のほうは、シカが好きな桑の葉っぱに、はちみつ、とうがらし、からし、チョコレートなど子どもたちが思いつくもの、いろいろなものを塗ってみて、どうなのかというのをやった。結果は全て失敗した。何を塗っても全て食べられた。だからシカの嫌いなものがわからなくて失敗したっていう、こんな結果が出てきました。

それで次、どうなったかっていうと、子どもたちの思考っていうのは、実験失敗した、で終わっていない。「じゃあ、どうする?」と聞いたら、すぐにこんな案が子どもたちから出てきました。つまりマリーゴールドを食べないのであれば、これの味をどうにか桑の葉っぱに付けてやったらどうなるかってことやりたい。逆に桑の味をマリーゴールドに付けたら食べるんじゃないかとか、こんな発想が瞬時に出てきたわけです。では、それをサポートしようっていうことで、先生たちがそのサポートに当たりました。

当時の校長先生がちょうど専門が化学だったんで、このようにアルコールで抽出してみたらっていうことで、マリーゴールドをすりつぶしてアルコール抽出やって、桑の葉っぱにかけてみました。実際どうなったかっていったら、マリーゴールドのスプレーしたものは食べなかったっていう結果が出てきます。ある意味、シカ避けスプレーを子どもたち開発しちゃったっていうぐらいの、そんな内容になっていったわけです。

だから、学会発表というのは全然意図したことではなかったんですけど、子どもたちの探求を進めていく中で、そういうところまで発展する。結果的に学会発表に耐えられるような内容になっているということになります。

その探求的学習を10数年やってから、この子ども教育学科ができたときに、こちらに来て、ここで環境教育をやることになりました。そこで、都城市の御池小学校ですね、霧島の中腹ぐらいに

ある御池小学校、ここの校長先生に沖縄の取り組みの話をしたら、その学習っていうものが、実は本当の意味での学力を付けることにつながると言うとおっしゃった。それで、御池は今必要とされる力を付ける、そういう本当の意味での学びができる場所じゃないかっていうふうに考えていただいた。そういうわけで御池小学校でのシカ研究が始まりました。

当時、新燃岳は噴いたばかりで、もう森の中はもう火山灰が10センチぐらい積もってるような状態。その中でも、子どもたちはヘルメット着けて、マスクして、探検に行くわけです。

そうすると、やっぱりシカの食べた痕跡が森の中に結構あるので、子どもたちはシカが食べるもの、食べないものっていうのにすごく興味を持ちます。それで、テストするために、いろんなものを置きました。最初は「食べられた!」と、つまりシカが食べてくれたって言って喜んでたんだけど、そこでちょっと「ほんとにこれシカが食べたのかな」って質問を投げかけてみるわけです。

そこで子どもたちは答えられなくて、一生懸命考えていった結果、足跡で調べればいいんじゃないかと気づいた。最初はカメラを仕掛けるとか、一晩中見てるとか言ったんですけど、現実的にどうやったらできるかっていうところで考えてくと、シカの足跡がつけばシカが食べたことが照明できるんじゃないかと。しかも周りには火山灰いっぱいあるから、これ運んできて撒いてみようじゃないかっていうことに決めました。それで一生懸命作業して、その結果、シカの足跡がついて、シカが来てここに仕掛けておいた食べ物を食べたっていうことを見事に証明できたっていうことです。

そのあと、環霧島会議という霧島山の周辺の市町村が作っている連携会議があるんですけど、その参加者300人ぐらいの前で、御池の子どもたちが以上の学習内容を発表しました。このうちの1人の女の子なんかは、校内の意見発表でも、途中で泣き出してもの言えないような子だったのですが、300人を前にして堂々と発表してたっていうことで、これは先生も保護者もみんなびっくりしました。

なぜこんなことができたかということなんです。

これは、自分で森を歩いてじっくり自然観察してテーマ決めるところから始めて、方法も自分たちで考え、失敗したとしてもまたそこから考えてトライする。そんなプロセスを経て、恐らく自分の手の中に入ってる研究なので、もうそれは自信を持って発表できたということだろうということですね。

その研究をやって、1つの発表の場として環霧島会議だったのですが、その会議は毎年はありません。そこで、御池小学校の子どもたちが何か発表する場、結局は研究は最終的に発表までいかないと完結しないだろう、表現するとこまでいかないといけないということで、今、テレビ会議をやっています。

これはお手元に新聞の資料があると思うんですけど、先日、御池小学校と沖縄の慶留間小学校をネットTVでつないで、毎年、子どもたちがやったそれぞれのシカ研究を発表し合っています。これもほんとに研究者の研究発表会みたいな形で、ほんとに生きた質問のやり取りっていうのが毎年なされています。これも今年で5回目になります。

ここでひとつ重要なポイントとしては、ただやるだけじゃなくて、それを表現する場を設定する。先ほど酒井先生の話にもあったんですけど、表現する場を設定して発表につなげるってことが大事なことです。

さて、今話してきましたのは、これらはいずれも小さな、もう10人にも満たない小さな学校の話なんで、これをどう普遍化していくかという観点から、今、都城市の、ちょっと大きい、1クラス20人の学校でやってみている例がこれです。

丸野小学校、このあたりにはシカはいません。畑の中、田んぼの中の、都城では普通に見られる学校です。では、何を素材にしようか、別にシカじゃなくてもできるんじゃないかということで、田んぼの用水路にいる生き物、この辺りの生き物を使ってやろうっていうことになりました。

進め方は一緒です。探検をして、興味や関心のあることを見つけて、まずそれを表現し、それから、課題を立てて調べていくという、こんな流れを取っていきます。

ある子どもたちはツバメのことをテーマにしました。別の子たちはヒメジョオン、ハルジョオン、通学途中の道でいつも見てる、この植物について調べました。それぞれいろんなものをテーマとしてやっていったんです。

この学習をしていくと、その過程で子どもたちのさまざまな変容というのが見られます。例えば先ほどありました「なぜ?」「どうして?」っていう疑問を、とにかく持つようになったとか、分からないことをスルーしてたのが、分からないことにいちいち引かかるといったとか、そういうことが出てくるということがあります。実際、成績も伸びたとか、これが担任の先生の実感としてありました。

また、担任の先生の感想として大きかった事柄として、クラスの中のそれまでの人間関係が、この授業によって良い方向に崩れた、変わったということがありました。成績のいい子がヒエラルキーのトップにいて、その下の子っていうのはなかなか発言できないような構造があった、それがこの学習をすることによって崩れた、ということだったんです。

学力の高い子っていうのは、わりと知識だけだもの言ってることが多くて、あまりそこで起こった事実をベースにしてものを考えて発言してはいない。しかしこういう授業の中で、学力が高くて知識による発言が強い影響力を持っているその子が、実はあまり実際に見たものをベースにしてものを発言してないってことを薄々、最初は薄々ですが、周りの子どもたちが感じ始める。知識だけに頼った発言に説得力がないことに、周囲の子どもたちが気づいていくんですね。やがて他の子どもたちがその学力の高い子の発言に影響されて発言しにくかった、というそれまでの状況が少しずつ変化していく。それまであまり発言できなかった子どもたちの自信につながっていった、結果として、普段発言してない子の発言のほうで、クラスの中で重みを増していくというふうなことが起きた。そういう人間関係の変化っていうのが一番大きな成果じゃないか、そういうふうにおっしゃってます。

さて、そんな中で、そういう探求をベースにし

て、2学期にどんな授業展開をしたかという、丸野の環境、きれいなのか、汚いのかという、あえて2つの対立を提示したわけです。先ほどESDのケラマジカの話の中で、二者の対立、二項対立じゃないという話をしましたが。あえて、ここで二項対立の課題を投げ掛ける。手段として。そうすると、喧々諤々、子どもたちは議論を始めました。例えば水がきれいか、汚いかについて話をしていく。そうすると、人間が飲むことはできない、だから汚いんだと言う子がいる。また、用水路を調べたらいろんな生き物がいて、サワガニを見つけた、サワガニがいる水っていうのはきれいな水なんだって言う子どももいる。ということで、1つの水ということなんだけど、視点が変わると、きれい、汚いっていうのは変わっていくってことを子どもたちが議論しながら感じていく。これがひとつ大きなポイントなんです。

この流れの中で、結論として、用水路の水をどうするのが良いと思うかって尋ねたときに、消毒して人が飲める水にするって言う子は1人もいないわけですね。結論としては、今の、まずはきれいだといえる、この現状を維持する。そのために自分たちが何をすべきかってことを次に考えよう、という、こんな展開にしたわけです。

そこまでやったあとで20人連れて用水路へ行くんですけど、着いたら、もうそれぞれそれぞれの部署で、何か体験活動やってるといよりは、自分たちが調べたいことが明確にあるので、そのためにそれぞれの調査地点にさっと散って、とにかく集中してやるということがおきる。1人も遊んでる子なんかいない。時間をもったいないから、自分の目的のために、とにかく調べたいことを調べるわけです。

3学期は、2学期の学習を踏まえて、地域の環境を守るためにはどうすればいいかということを考えていきます。(この講演会の時点で3学期半ばだった)

ここで流れを見なおしますと、とにかく1学期はとことん自然のことを探求していきます。2学期は焦点を絞って、きれいか、汚いかっていうような話をしてあって、どうあるべきかということそれぞれが認識していくという、そういうプロ

セスです。3学期は、どうするかということで、こういう1学期、2学期のベースがあって、3学期の環境のために何するかという話になっていきます。

ですから、簡単に、ゴミ拾い活動に行くこともできるんですけど。環境が汚い、みんながゴミ捨ててる、ごみ拾おうかという話に行ってもいいんだけど、それはやっぱり実感を伴っていないということで、このプロセスが大事だということを考えて、こんな授業展開を担当の先生と対話しながら一緒にやってきたんです。

最終的にやることは、ごみを減らすことであったり、緑を増やすことであるっていうことで、ここだけ見ると分かんないんですけど、実はここに至るまでに、子どもたちの中で、かなり考えているものが行われているっていうことになります。

その現れだと思ふようなことも起きました。このクラスのあるグループの、緑を増やすということを決めた子どもたちは、最初は、用水路の周辺に緑、木を植えるって言っていました。で、それには許可が要するという話になり、いったんは市役所に問い合わせたんですが、これは許可できない、地主の許可が要るっていうことで、どうするかということになった。このことを校長先生に相談して、学校の美化運動につなげていこうということになり、校長先生に子どもたちが相談にいったとき、「実は学校はね」っていう話をしてもらった。「学校の花壇、空いてるところを使って、ここ何か植えてもらったら学校としても助かるよ」というわけです。

そうすると子どもたちは、もう俄然やる気で、朝のボランティアの時間に、最初は5人のグループだったんですけど、次第にクラスの子が入ってきて。これ、先生は全く何も言わないで、指示してるわけじゃなくて、ほんとうに自主的にやっているわけです、主体的に。そういうのにどんどん周りの子どもたちは引き込まれていって、だんだん人が増えていって、みんなで花壇の草とりから始めて、苗作りも、教頭先生にいろいろ教わりながら、実際自分たちで作るということで、本当に単なる作業ではなくて仕事になっていました。というのは、面白かったんですが、子どもたち自主

的に役割分担のスケジュール表を作ってたんですけど、それが「作業の」工程表じゃなくて「仕事の」分担表と書いてあって。要するに、これは彼らがやるべき「仕事」だっていうふうな認識をしてるんじゃないかということです。

この子たちは看板を作って地域に設置した。「ゴミ捨てないで」と。この子たちも自主的に土曜日に集まって、もう子どもたちだけで話を決めて、「ここに集まってごみ拾おう」ということで、こんなことが進んでいる。だから、先生が主導して、みんなで「じゃあ、今日のごみ拾いましょう」ではなくて、とにかくごみを減らすために何ができるかっていうことを一生懸命考えて、こういう看板を立てています。

これも簡単ではありませんでした。看板を作った最初は電柱に張るって言ったけど、九電に電話したら「駄目だ」って言われた。市役所に電話したけど、市役所は許可はできんと。やはり地主に聞いてってというような話になってって、地域の公民館長に相談して、もちろんそこは先生は段取りをしてるわけですけど、子どもたちの中では、いろんなものにアプローチするけど跳ね返されるという経験を繰り返した挙句に、公民館長に相談した。すると、「ここ立てていいよ」っていうことで、これも先生はストップかけてただけど、休みの間に子どもたち同士集まって、もう勝手にこれ作っちゃって「できました」って言って学校に持ってきて、「じゃあこれ、公民館長と一緒に、ここに立てようね」って言って立てたっていうふうなことで、この看板だけ見ると分かんないんですけど、実はその背景として、課題解決的な学習っていうのが背後にしっかり隠れているという、こんな内容になってます。

ここでも20人のクラスなんで、今、綾町の綾小学校の総合学習にちょっとかかわるようになっています。そこは35人の2クラスで、いわゆる普通の学校と考えればいいと思うんですけど。そこでも、規模が大きいからできないじゃなくて、やり方によってできるというふうに考えています。それが今、取り組んでる取り組みになります。

以上が私からの発表になります。


.....

今日は年度末の非常に忙しいときにお集まりいただき、ありがとうございました。おそらく、それぞれの参加された方々に、もっと長く、詳しく聞きたいということもあるかと思うんです。また機会を設けて、ESDの講演会も設定したいと思いますし、今回は人間発達学部の中での講師3人でしたけれど、今度は、それこそ管理栄養であるとか、食育の話であるとか、環境園芸の、造園の話であるとか、それこそ畑の話であるとか、そういうことも含めて、また、総合的な話題提供の中で教育っていうことを考えていければと思います。

今日はお忙しい中、ほんとにありがとうございました。

これで、今日の講演会を終わりたいと思います。

持続可能な社会の担い手を育てる 南九大のESD



＜タイムテーブル＞

開 場 13:00
講 演 13:30 - 15:30
交 流 会 15:30 - 17:00

13:30 - 13:40 / 遠藤 晃
「本日のキーワード」
アクティブ・ラーニングと
カリキュラムマネジメント

13:40 - 14:00 / 谷村佳則
「特別支援教育のなかのESD」

14:10 - 14:30 / 酒井喜八郎
「社会科教育のなかのESD」

14:40 - 15:00 / 遠藤 晃
「総合的学習のなかのESD」

15:00 - 15:30 / ティータイム
ディスカッション

15:30 - 17:00 / 交流会

次期指導要領改訂のポイントとなる
「アクティブ・ラーニング」&
「カリキュラムマネジメント」

学校現場では、
どのように展開すればよいのでしょうか？

M-cafe9 では、ESDの実践事例を通して、
その具体的なイメージを探っていきます。

コーヒーを片手に教育について考える、そんな講演会です。
どうぞ、お気軽にお出かけ下さい。

環境教育講演会 "M-CAFE 9"
いろんなところでESD 「学校教育のなかのESD」

*ESDとはEDUCATION FOR SUSTAINABLE DEVELOPMENTの略「持続可能な社会づくりの担い手を育てる教育」のことです

講師：谷村佳則/酒井喜八郎/遠藤晃 南九州大学・人間発達学部

日時：2016年 3月 12日 (土) 13:30~15:30 [13:00開場]

場所：南九州大学 宮崎キャンパス 本館2F 大会議室

*サテライト会場：都城キャンパス ひばり館1F 環境教育センター

入場無料 (当日受付可)

主催：南九州大学 人間発達学部附属 環境教育センター

宮崎県都城市立野町3764-1 電話:0986-21-2111(代)

